

定例教育委員会会議録

令和4年8月29日

境港市定例教育委員会（令和4年8月29日委員会会議録）

招集年月日 令和4年8月29日 15時30分

招集場所 市役所第一会議室

開 会 15時30分 教育長宣言

教育委員会 教育長 山本 淳一

委 員（職務代理者） 中田 耕治

委 員 十河 淳 渡邊 不二子 大部 由美

教育長から説明のため出席を求められた者

教育委員会事務局長 松 原 隆

教育総務課長 角 純 也

生涯学習課長 松 本 昭 児

教育総務課長補佐兼指導係長 柳 楽 力 人

教育総務課長補佐兼管理係長 足 立 統

傍聴者数 なし

会議書記 教育総務課長補佐兼管理係長 足 立 統

提出議案 なし

協議事項 標準学力検査等について

報告事項 8月行事報告、9月の行事予定

新型コロナウイルス感染症における対応ほかについて

したいと思います。

中田委員

説明を聴いていますと読解力が根本になってくるという印象をすごく受けます。経験の部分で学校での学習と生活の中での体験という部分が今は全部学校での学習におんぶにだっこになっている気がします。アリの話にしても以前は普段の生活の中で見ていたものが、学校の学習の中での話になってしまっている。例えば分数の問題でも兄弟が多くて均等に分けたりする機会が少なくなっているのかなと感じます。これまで生活の中でなんとなく感じとっていた部分が学校の学習という部分で文章に置き換えられてしまうとそここのところの読解力という部分が非常に難しいかなと、そういう部分で今の子どもたちは大変だと思います。

柳楽補佐

質問紙の中で自然の中で遊ぶことや自然観察をすることがよくある、ときどきあるという設問があるのですが、ここもマイナスになっており、実際に見たり聞いたりする等、経験することで得られることが多いので心配しております。また、バスを出して実際に見学・体験させるということもなかなか難しい部分がありますので、子どもたちの様子を見ながら、生きた知識が得られるように考えていく必要があると思います。

中田委員

興味の持ち方、持たせ方というところは、なかなか学習の中で興味を持ちましょうと言っても難しい部分があると思います。普段の生活が少し変わってきているという部分もあり、我々だと興味があることに対してちょっと調べてみようかと思い、動画を見たりインターネットで調べたりするのですが、子どもたちも興味という部分が案外少ないのかもしれないし、時間がないのかもしれないね。今はそういった興味の持たせ方というところも学習の一貫になってしまっているような気がします。

柳楽補佐

わからないことがあったときに自分で調べるということが大事で、そこは力をつけていく必要があると思います。質問紙の中でもわからないことがあったときどのようにしていますかという設問があり、自分で調べると答えている子どもの正答率は高くなっています。

中田委員 「わからないことをわからない」と自信を持って言うことができないのかもしれないですね。

渡邊委員 それはすごく大事ですね。

中田委員 大人になってやっと「今言われたことはわかりません」と返せるようになりますものね。

柳楽補佐 確かに「わからないことをわからない」と言える、教室の中で間違ってもそれが認められ、深い学びにつながる学級集団であって、仲間づくりがしっかりできている、QU等でも落ち着いているようなクラスであれば良いと思いますし、そうでないクラスはしっかりチームとして立て直していく必要があると思います。

大部委員 私たちは覚えることがメインで点をとっていたのですが、今は読解力とか探究学習のようなものが入ってきて、企業の方の話の聞いても論理的な思考が求められます。「高卒でも取説が読めるように。報告書の行き来ができるように」となるとそこがすごくネックで、国語力をつける必要があります。国語も今は論理国語と現代国語に分かれていて、大学入試等でも論理国語が入ってくるようなので、「これは何を説明していますか」となったときにそこはすごく大事ななと思っています。それを高めるためには英語力を上げて、主語、述語、「私はこうです」と結論が言え、なぜならば…」というように文章能力をつけると数学でも理科でも質問文で何を求められているかというところがわかってくるとと思います。日本人は話が長くなる傾向が強いので、もう少し話を短くするということを意識することが大事だと思います。

山本教育長 学力について各校を回っていろいろと話をしているのですが、学力とは何かと尋ねると各先生で捉えが違っており、「わかっています」と言いながら、学力観が違ってきます。「点数です」と言う先生、「一番が良い」と言う先生、「自分自身が頑張ればできるという自尊心や自己を肯定する力が学力の土台になる」と言う先生もおられますので、そこをきちんと押さえながら動いていないのではないかと、学校の中で学びのベクトルを揃えるこ

とが学力にとって大事だと話しています。もう一つは小学校の指導力がないのではなく、「行事で楽しいことを中心に子どもたちをやる気にさせることが変化させることである」という呪縛にとらわれています。更には授業が1回で終わること、中学校は3クラスあるので、クラスの反応を見て修正していくとだんだんうまくなくなっていきますが、小学校だとベテランの先生でも何年かぶりにこの単元を教えるということもあって、それも一発勝負で自分のクラスだけで終わります。その辺りを体系的に見直す必要があると思います。そのためには、何か新しい学校の仕組みがないとできないものなのか、兼務というような発令をして、その先生が社会科の積み上げをずっとやっていく、社会や理科というのは暗記することで成立しているところがあるのですが、暗記を活用できないところに重きを置いていないので、「教えた」で終わってしまっている。これは先生の問題です。

子どもたちの学びの環境を考えると家庭学習へのアプローチというところに地域や保護者、社会全体で学びの環境を整えるというところにシフトできていないのが境港の特徴で、「帰ったらテレビを見る」、「帰ったらゲームをする」というところに社会的な見守りというか子どもたちが自制をしながらやれるような力をつけていくことが子どもたちに課せられたものになると思います。そういう相互作用があるので、「教員がダメ」だとか、「学校がダメ」だとか、「保護者がダメ」だとかという話ではなくて、学ぼうとする土台や学習を生活に結びつけたりする力が今後、地域を上げてできると非常に変わってくると思います。

来年度は英語の権威である北原先生と国語の権威である甲斐先生が「(手弁当)で来てあげる」と言って下さっており、先生を刺激するのではなく、子どもを直接刺激するという話で、「言葉って大事だよ」「言語の活動で自分を表現することができるんだよ」ということを伝えていきたい」と言って下さっております。そういった活動をどう学習と結び付けていくかというところで学力の結果は後で着いてくるだろうと私は思っていますので、それほど焦ってはいません。このような言語を大事にする活動がうまく成立していくようなシステムを作って、来年は手弁当でもそれ以降は予算化をしてお二人を呼ぶことができるようにと考えております。

